

令和5年度 連雀学園 三鷹市立第一中学校 学園・学校評価報告書

このことについて、下記のとおり報告いたします。

記

学園評価 ※学園内で統一記述				学校評価 ※学校ごとに記述									
今年度明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること		来年度の重点課題を解決するための改善方策		今年度明らかになった課題 ※「第2回学校関係者評価」を経て記述		来年度の改善方策 ※「第2回学校関係者評価」を経て記述							
<p>②重点課題</p> <p>●連雀学園の子どもたちに育てたい力を、学園、保護者、学校で共有し、教職員の当事者意識を高めるとともに、CS委員や地域、家庭と協働する。</p>		<p>③改善策</p> <p>◎連雀学園構成メンバーによる熟議を行い、学園・学校の教育実践を振り返り、目標や取り組みなどの重点化を探り、新たな指針を作成する。</p>		<p>◎地域部活動の仕組みについては連雀ジョイナスとの連携を図ること、校内における一定のルール化が必要である。</p> <p>◎学園の「指針」の策定に当たって、生徒会役員を中心とした中学生の関与の在り方を検討するべきである。</p> <p>◎「たてわり活動」は小・中間のスケジュール調整や学校間移動などを考慮して、持続可能で無理のない計画が必要である。</p> <p>◎「考える力」の育成をさらに推し進めるために全学年共通で具体的な実践に取り組みが必要である。</p> <p>◎生徒会活動を中心とした「自治的」「自主的」な活動をより一層推進するために、具体的な取り組みの目標が必要である。</p> <p>◎業務改善の取り組みは単に数値目標(時間外在校時間など)を掲げるだけでは効果が期待できないことが明らかになった。</p>		<p>◎校内で独自に「部活動の在り方検討会(仮)」を設け、保護者・地域も交えて部活動の矛盾と課題の解決の方向性を探ることとあわせて、連雀ジョイナスとの連携による地域部活動として「ダンス部」を執行的に設置する。</p> <p>◎コミュニティ・スクールとしての活動、生徒会役員を中心とした中学生がいわゆる「下請け」ではなく「企画・検討」の段階から関わることで取り組みを行う。</p> <p>◎令和5年度の実績評価も踏まえて、小・中交流の機会を既存の行事等を生かすことで実現できるように計画する。</p> <p>◎学習のガイダンス、紙を基盤とした学級集団づくり、行事実行委員会指導の改善など「考え、判断し、実行する力」の育成に取り組みを行う。</p> <p>◎生徒の運営による「新入生オリエンテーション」の新規実施や、生徒会役員の提案による「STGs」の取り組みを推進するために、プロジェクトチームを設置する。</p> <p>◎業務改善のポイントとして個々の教員が「削減する業務」を具体的に上げ、そのスリム化と削減の取り組みを年間を通して支</p>							
取組項目	今年度の重点目標	成果	課題と改善方策	取組項目	学校の経営目標(中期目標)	今年度の重点目標(本年度目標)	今年度の重点目標を達成するための具体的な方策	第1回評価 取組 成果	第2回評価 取組 成果	自己評価(第2回)	学校関係者評価(第2回)		
コミュニティ・スクールの運営	・スクール・コミュニティの創造に係る内容 ・コミュニティ・スクールの運営に係る内容 ・地域との効果的な連携に係る内容(関係機関との連携、教育ボランティア等)	○3部制への取組みは、各校進んでおり、施設利用を一定程度開始することができている。 ○CS委員会での熟議を通して、子どもたちに育てたい力を話し合い、必要な取組みを具体的に考えることができた。 ○学園ニュース「ジョイナス」の計画的な発行と連雀文化祭「笑顔満開祭」の実施を実現することができた。	●施設利用する人数が適正となるよう、支援員を確保する。新たなプログラムの開発も視野に入れている。 ●子どもたちに育てたい力は継続して、話し合っていく。連雀文化祭は、継続するための課題と対応を明らかにしていくことが必要である。 ◎それぞれの施設のニーズと、それに見合う支援員数やプログラム等を明確にするようにして、運営及び評価・改善をしていく。 ◎CS委員会で大切にきた熟議の継続やおとな熟議の実施により、学園の教育実践の改善を図る。文化祭等の取組みについては、早期に計画・実施できるようにする。	人間力・社会力の育成	コミュニティ・スクール委員会や連雀ジョイナスについて、管理職のサポートの下、会長・副会長を中心に運営できるようにする。	①小学校での教室開放の実施、中学校での地域の方による部活動の試行。 ②連雀学びのスタンダードの改訂 ③連雀ジョイナスの活動を計画的に実施する。	①地域指導者による部活動振興のために事務局を設置し、「茶道」「アールンジ」等「陶芸」等の活動を支援する仕組みを整備する。 ②CS、CS委員と教員や保護者、児童会・生徒会などの熟議を進める。 ③年度当初に連雀ジョイナスの計画を立て、すすめる。	1	1	2	1	11月からは「ダンス」も実施しており内容の面で充実が図られた。校内の事務局組織に加えて連雀ジョイナスとの連携も整備しつつある。本来の目標は達成されていると考えるが、予定よりも回数が減った活動があるため、全体の参加者総数は想定を大きく下回る見込みである。	妥当:21件、妥当ではない:0件、無回答:3件
と小・中一貫教育活動	・三鷹市小・中一貫カリキュラムの実施・検証に係る内容(学園研究等) ・小学校間での授業交流 ・乗り入れ授業 ・児童・生徒の交流活動	○学園の交流活動を予定通りに実施し、児童・生徒に満足感や学園への所属感を実感させることができた。 ○学園研究は、連雀学園一貫カリキュラムに則り、学園研究テーマの実現へ向けて、計画どおり実施することができた。 ○乗り入れ授業は、ほぼ予定通り実施することができている。	●交流行事の内容については、4校の状況に応じて、常に見直しを図っていく。また、小・小の交流も計画的に実施していく。 ◎今年度実施する母校訪問形式のたてわり活動や小・小の交流行事について、計画的に実施できるよう、推進委員会で早めの提案をしていくようにする。	学園・学校運営	コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育を推進し、9年間の義務教育の学びと15歳の姿に責任をもつ学校	①小・小の交流、小・中の交流活動を実施する。 ②4・5年生の選択交流学習、6年生の一体験、1年生から中学校3年生までの連雀たてわり活動を実施する。	①4・5年生の選択交流学習、6年生の一体験、1年生から中学校3年生までの連雀たてわり活動を実施する。	4	-	4	4	4・5年生の選択交流学習、6年生の一体験の感想ではほぼ100%の児童が肯定的な振り返りを行っている。連雀たてわり活動は、3月に実施予定。	妥当:21件、妥当ではない:0件、無回答:3件
(知) 様々な学力	・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な推進 ・三鷹市小・中一貫カリキュラム、三鷹「学び」のスタンダードの活用による授業力向上 ・授業のユニバーサルデザイン化による分かる授業の推進 ・主体的・対話的で深い学びの推進 ・GIGAスクール構想 ・みたく地域未来塾をはじめとした補充学習等	○学園の研究テーマ「知的コミュニケーションを活かした学習指導の工夫」に向けて、4校各々が授業改善に向けた取組みを推進できた。ICT機器の活用や「考える授業」の実現の視点からも、一定の成果が見られた。 ○算数習熟度別指導や「地域未来塾」など、基幹学力の定着・向上を目指した取組みも、計画的に実施できた。	●到達目標に達していない児童・生徒や学力調査等に肯定的でない児童・生徒への理解と指導の充実を継続して行っていく。 ●ICT機器の活用については、ほぼできてはいるが、積極性については、まだ個人差が見られる部分もある。 ◎全国学力学習状況調査や市の学力テストを活用して、全体の傾向と個々の様子を把握し、引き続き授業改善に努める。 ◎ICT機器の活用の好事例を、学園研究や各校の研究・研修のなかで共有し、積極性を高めていく。	と小・中一貫教育活動	「指導の個別化」と「学習の個性化」の手段として学習用端末と学習用グループウェアのより一層の活用を図る。	新設した情報推進部を中心に各教科におけるICT活用のサポートを推進し、授業の効率化を図ることで「考える」活動を保障する。	学習用タブレットの活用によって授業中に「考えたり話し合ったりする時間が増えた」と回答した生徒は75.9%である。次年度は「考える授業」の充実を図るとともに、さらに諸活動の効率化を図られるよう、連絡黒板の電子化をはじめとした利活用を促進する。	2	-	4	3	妥当:20件、妥当ではない:1件、無回答:3件 ・考える時間の充実に対する評価として、「考えたり話し合ったりする時間が増えた」とすると量の観点になりますが、充実とは質の面で評価することが妥当だと思います ・連絡黒板とは何でしょうか?	
(徳) 豊かな人間性	・考え議論する道徳 ・いじめの早期発見・早期解決 ・デジタル・シティズンシップ教育 ・情報モラル教育 ・生活指導等	○学園共通でHyper-QUを導入して学級づくりを活かし、よりよい人間関係づくりを進めることができた。 ○小学校各校通常の学級における児童への支援策について検討し、個に応じた授業展開を実施している。	●Hyper-QUの導入により、児童・生徒の状況の把握はできたが、学級集団作りや人間関係づくりを生かしていく工夫については、今後も各校で推進したり、学園で共有したりする必要がある。 ●通級拠点校との連携により、引き続き支援策の検討や個に応じた授業展開に取り組んでいく。 ◎学園生活指導部や研究全体会での研修、学園研究での実践の共有を深めていく。 ◎学園(小学校)合同でのプラン研修等、実践につながる研修の実施。	児童・生徒の学力	自治的・自律的で親和的な集団づくりを通して、多様性を尊重する心と思いやりの心を育む。	学級集団を集団づくりの基盤として位置づけ、意図的・計画的な集団づくりを全ての学級で展開する。	年度当初に学級集団づくりの考えやノウハウを学ぶ研修会や資料提示を行うとともに、学年主任による進行管理や管理職による個別面談、校内ミニ研修会における課題共有を実施して年間の取り組みを推進する。	4	2	4	3	計画的な学級集団づくりを多くの教員が経験することになったが、集団の質的な充実については次年度以降の課題としたい。学校行事等を契機とした意図的な集団編成について年間の見直しをもって取り組めるように次年度も継続する。	妥当:21件、妥当ではない:0件、無回答:3件
(体) 健康・体力	・基本的な生活習慣の確立 ・体力向上、健康にかかわる内容(食育)等	○体力調査の結果からは、三鷹市の平均をほぼ上回り、改善が見られた。授業改善の成果が見られている。また、体を動かしたり、運動したりすることが好きな児童・生徒の数も一定数見られる。 ○調査への回答から、児童・生徒が健康な生活や体力づくりに対しての意識をもっていることも確認できた。	●児童・生徒の運動に対する意欲や関心をさらに高めたり、実際に運動する機会を確保したりする。 ●健康な生活と体力向上への意識を家庭と連携して高めていく。 ◎学園合同あるいは連携した運動の強化週間や意識付けを高める取り組みを再開していく。 ◎体力調査の結果を活かした授業改善の継続と、家庭への周知の方法の工夫をしていく。	健全育成	自分自身の健康に関心をもち、日常的に運動に親しもうとする態度を育成する。	自分自身の健康に対する関心を高めるために、体力・運動能力調査の活用を図る。	調査結果を基に、生徒一人一人に健康を維持し、運動に取り組みうとする個人目標を設定させるとともに、校内における日常生活の中で取り組める体力づくりについて保健委員会等の生徒の活動を通して働きかける。	-	-	4	1	調査結果を踏まえて93.4%の生徒が今後の目標について考えている。特に筋力、巧緻性、瞬発力については50%超の生徒が課題とらえている。なお、保健委員会のキャンペーンにより約53%の生徒が日常生活の中での体力・健康づくりを意識するようになっており、成果指標としては「1」である。期間が短かったこともあるため次年度はより充実を図りたい。	妥当:21件、妥当ではない:0件、無回答:3件
特色ある教育活動	・特色あるキャリアアントレプレナーシップ教育 ・デジタル・シティズンシップ教育 ・現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成(伝統や文化に関する教育、主権者に関する教育、法に関する教育など)	○キャリア・アントレプレナーシップ教育は、各校の特色を生かして展開することができた。 ○児童会・生徒会活動の充実や熟議との連携、学校での意見集約など、児童・生徒の意見を活かした取組みが、各校で推進された。児童・生徒の満足度も高かった。デジタル・シティズンシップ教育を反映させ、連雀学園でのタブレットルールの見直しも始まっている。	●児童・生徒の意見を活かした児童・生徒会の活動を継続していく。また、児童・生徒会に属さない児童・生徒の意欲の向上。 ◎各校での意見集約を引き続き行うこと、児童・生徒会での意見交換や学園での情報共有と、連携を強化する。また、CS委員会など、地域諸団体の主催する活動への参加を促す。	コミュニティ・スクールの運営	生徒会活動を主軸とした生徒主体の教育活動を展開する。	学校生活上のルールの見直しに生徒を参画させることで自治的・自律的に学校生活を築こうとする気運を醸成する。	生徒会を中心に「一中生らしさ」について協議をさせることで目指す生徒像を具体化し、さらに目標実現に向けて取組むべきこと、守るべきこと等を明らかにする熟議等を行う。	2	2	4	4	目指すべき一中生の在り方について前期生徒会の課題意識が後継に引き継がれた。全校アンケートの実施や、定例化した生徒会朝礼、復活した評議委員会など生徒から生徒へ働きかけを行う仕組みも整いつつある。生徒による自治的な活動が一中の新たな伝統として根付くように次年度の充実を図りたい。	妥当:21件、妥当ではない:0件、無回答:3件 ・具体的にどのような議案があるのかが可能であればお聞きしたい
教育の質の向上を目指した学校の働き方	・退校目標時間、ノー残業デー等の設定 ・教員のタイムマネジメント力の向上 ・人材の効果的活用 ・地域行事等への参加の工夫等 ・部活動の適正化	○退校目標時間、ノー残業デーの設定等、各校実施し、超過勤務時間の減少に努め、一定の成果を見ることはできている。 ○専門スタッフの配置とその活用、校務支援システムの活用が、「当たり前」になり、効果的な会議運営につながっている。	●在校時間や超過勤務の時間には、ばらつきがある。時季による増減があったり、個々のもつ業務の内容に左右されたりする。 ◎校務の均等化を図るとともに、繁忙期を見据えて業務の先取りをするなど、タイムマネジメントを意識した働き方に改善させ、児童・生徒と向き合う時間を確保できるようにしていく。	学校の働き方改革	組織的な課題解決力の育成を目指すとともに、教職員の働き方改革を推進する。	業務が集中する期間の緩和を図るとともに、教員自身の働き方改革の取り組みを支援する。	テスト期間を中心とした繁忙期に他の業務が重ならないよう極力調整を図るとともに、教員自身には面談を通して働き方改革の具体的な方策を考えさせて取組みを進行管理し、12月の時間外勤務時間を月45時間以内とする。	1	2	3	3	突発事態への対応や日程的な限界はあるものの、年間予定の調整等により繁忙期の業務量軽減はある程度実現されている。サポート面では年度内に3回目を実施する予定である。時間外在校時間が45時間未満の教員は評価時点直近の3か月での66%(9月)、60%(10月)、64%(11月)である。	妥当:20件、妥当ではない:1件、無回答:3件 ・部活動対応、定期試験など学校行事が多いのにこの数値は過少報告ではないかと疑いが残る